九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

朝鮮の植民地初等学校 ： 慶尚北道における伝統教育からの移行過程研究

古川, 宣子
大東文化大学

https://doi.org/10.15017/2202953

出版情報：韓国研究センター年報. 8, pp.75-75, 2008-03-28. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

朝鮮の植民地初等学校

― 慶尚北道における伝統教育からの移行過程研究 ―

大東文化大学　古川 宣子

報告者は、＜Ⅰ＞2001～2004年度科学研究費補助金基盤研究（B）(1)「長期的視野における韓国の地域社会伝統研究－近世両班社会から現代都市へ－」において、日韓7名の研究者による大邱広域市達西区月背地区を対象とした地域研究に参加し、その研究成果として「1920年代大邱徳山学校」（『朝鮮史研究会論文集』45集・2007年10月、117～145頁）をまとめた。本報告では、この共同研究の性格や研究成果について主に説明し、その研究成果の延長上にあって現在進行中である＜Ⅱ＞2006～2008年度科学研究費補助金萌芽研究「朝鮮の植民地初等学校―慶尚北道における伝統教育からの移行過程研究」について言及する。

＜Ⅰ＞については、共同研究の概要・対象地域の史料的特色などに触れた上で、以下のような、報告者の分担（植民地期の教育調査）とその成果について述べたい。

報告者は植民地を分担し、月背面上仁洞を中心とした教育状況調査を行った。当時洞内で最も多く居住しており、かつ現在も門中組織の活動を活発に続けている丹陽禹氏に対する調査を核として、私立学校関係と独立運動関係の調査を進め、「洞内の教育状況を詳細に復元すること」を目標とした。その結果、独立運動をした容疑で1919年に逮捕された人物が、釈放後自分が居住する上仁洞で1920年代に運営した私立学校の教育課程・運営状況などその学校としての実態を解明することができた。かつ、この学校の行政側の位置づけが、「学校」ではなく「講習会」であることが『達城郡勢一覧』（1923年版）の掲載から明らかになり、教員だった者の日記から私立学校として認可を申請する書類を提出していたが「不合格」だったことなどが明らかになった。こうした諸事実が植民地教育史上何を意味するのか、その歴史的性格など、研究成果の研究史上の意義などについて、まず扱いたい。

以上の研究成果を基礎として、現在＜Ⅱ＞を行っている。「植民地朝鮮における学校普及と社会」というテーマで、特に初等学校が他の機関を圧倒し中心的位置を占めていく過程を、その背景となる植民地社会との関係の下に明らかにすることが本研究の全体的構想である。

その上で、本研究の課題としては、朝鮮の教育的伝統の上に、植民地近代学校がどのようにもちこまれ、いつどの程度普及したのか、普及の背景となる行政側が打ち出した政策と朝鮮社会における教育要求について、両者がどのように衝突・妥協しつつ教育が展開されたのか。上記の全体像を構築するための地域研究として、慶尚北道についての具体像を提示するのが本研究の目的である。